
りんね ぱにっく

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんね ぱにつく

【Nコード】

N4454F

【作者名】

るつね

【あらすじ】

いきなり妹が前世で俺と恋人だったと言い出して……。

恋人たち

「あたしとおにいちゃんは、前世で恋人だったのよ！」

風呂あがり、自室でくつろいでいると、突然妹の真紀穂が来て、こんなことをのたまった。

とりあえず、はたいておいた。

「ったー。なにするのよ！」

「そっちこそ、いきなり何言ってるんだ」

「だから、あたしとおにいちゃんは前世で「はい、ダウトー」

「最後まで言わせてよ！」

俺はため息をつき、

「どんな漫画やゲームに影響されたのかは知らん。だが、兄ちゃん、小学生のうちから豪快に道を踏み外すのはどうかと思うぞ。まだ間に合う、こっちに戻っておいでー」

「ほんとなの！ さっきBLの小説のネタを考えてる時に、ふっと前世の記憶がよみがえったの！」

別の意味で、妹は手遅れかもしれない。

「まあ、その小説うんぬんは別の機会に話し合うとして、だ。前世で恋人？ 俺とお前が？」

「そうよ」

と胸を張る。何故そんなに誇らしげなんだ。

「まあ仮にだ。何百万歩譲ればいいのか分からんが、譲りに譲って地球を一周して元の位置に戻るくらい譲って、お前のその妄想が真実であると仮定するのも忌々しいが、ともかく人生ってそんなものだよね的なノリで諸々の問題を捨て置きつつ、話を進めるとして」

俺は、ぽん、と真紀穂の肩に手を置いた。

「俺たちは血の繋がった実の兄妹だ。だから、な？」

「うん、お父さんたちには秘密ね」

「そーゆー後ろ暗いことが前提の関係が嫌だと言っとなるんだ！」

その時、いきなり窓が開いた。
「とうっ！」

間髪いれず、跳び込んできた影がある。影は二、三回前転して止まると、立ち上がってこちらを向いた。

「半沢つばさ、参上！」

「呼んでねえよ」

隣に住む幼なじみだった。

つばさは、艶やかな長い黒髪をかき上げる。シャンプーのほのかな香りが鼻をくすぐった。……不快だ。

「はっはっは、呼ばれなくとも暗黙のうちの期待に応え現れる。それがこのボク、半沢つばさが半沢つばさである所以さ」

文字通り、お呼びでないというやつである。

「ていうか、屋根伝って窓から入るのやめろって言ってるだろ、危ないから」

「義明、心配してくれるんだね、それは愛？」

「前に落っこちて、骨折ったろうが。あんな騒ぎは、もうごめんなだよ」

照れ屋だなあ、と、つばさはつぶやき、

「まあいい。それより、面白い話をしていたね。前世がどうか」

「ああ、いきなりこいつが前世で俺と恋人だったとか言い始めてな。病院に連れて行こうかと思うんだが、やっぱり精神科かな。それとも脳外？」

「ほんとなんだってば！」

「真紀穂ちゃん」

膨れる真紀穂に、つばさは首を振る。

「残念ながら、君とお兄さんの恋は成就しない」

そうだそうだ、もっと言ってやれ。

「なぜなら、ボクこそ義明の運命の人だからだ！」

……えっと。

「なにが運命の人よ！」

どういつ反応をすればいいか分からず固まる俺をよそに、真紀穂がつばさに食ってかかった。

「あたしなんか前世でおにいちゃんと恋人だったんだから！」

「はっはっは、前世だって？ 生ぬるいね」

つばさは親指で自身を指差し、

「ボクは義明と前世のそのまた前、つまり前世の前世で恋人だったのさ！ 前世の恋人などより、よっぽどボクの方が、おや、どこへ行くんだい、義明」

「いや、もう俺が病院に行った方が早いかな、と」

「なぜだい、義明。実の妹と恋仲になるよりは、ボクの方がよっぽど健全じゃないか」

「だって男じゃん、お前」

「のーぷろぶれむさ」

つばさは、艶やかな長い黒髪をかき上げる。シャンプーのほのかな香りが鼻をくすぐった。……不快だ。

「男同士でも気持ち良くなれる」

「さっき健全がどうか言わなかったか、おい」

「だめよ、BLは二次元の中だからこそ美しいんだから！」

「お前も黙れ」

収拾がつかなくなってきた。
と。

にゃーん。

鳴き声のした方を見ると、飼猫のノワールが部屋に入ってきていた。ああ、もう俺の味方はお前だけだよ。

ノワールは口論する二人の前まで来て、

『義明殿は、わらわの前世の前世の、そのまた前世の恋人じゃ。手を出すこと、まかりならん！』

ブルータス、お前もか。

恋人たち（後書き）

苦手科目に挑戦してみました。

騒がしい昼餉

「俺はさあ、平凡に生きたいだけなんだよ」

『さようか』

「平凡に高校卒業して、平凡に大学か専門学校に行つて、平凡に就職して、平凡に結婚して、平凡に子供作つて、平凡な老後を送りたいんだ」

『夢があるのかないのか微妙なところじゃの』

「たとえば、宝くじで一等当てたとするだろ。俺は当選金の受け取りを拒否するね。だって平凡じゃねえもの、そんなの。一万円で充分だ」

『分相応というものがあるからの。自分の器に合わせ大金を手にする、身を持ち崩すことになりかねん』

「昨日、真紀穂やつばさが前世がどうこう言う夢を見て、ちょっと気分が悪いが、目覚めてみればこの通り平凡な朝。素晴らしい、平凡万歳」

『わらわも同じような光景を目にしたが、夢にまであやつらが出てきたとなると、気分が悪いのもうなずけるの』

俺は時計を見た。

「……行くかな」

『うむ、気をつけてな』

「あら、あんた、まだいたの」

キッチンから母親が出てきた。

「そろそろ出ないと、遅れるわよ」

「今、行くところだよ」

俺は弁当箱を鞆にいれると、玄関に向かった。

にゃーん。

「あら、ノワール。お見送り？ 偉いわねえ」

靴を履きつつ、玄関まで出てきた飼い猫に目をやる。どうでもい

いが、ノワールという名前なのに、三毛なのはどうなんだ。ネーミングセンスがないというよりは、ネーミング詐欺という感じである。にゃーん、ともう一声。

「……行ってきます」

極力、ノワールを見ないように言っ、外に出た、ところでしゃがみこみ頭を抱える。

「なんで、猫がしゃべってるんだよ……」

「どうした、疲れているようだが」

昼休み、その声をかけてきたのは、西園寺すみれ草だった。

「あ、ああ、いや、ちよつとな」

しゃべる猫よりみしたが、彼女も俺の苦手な部類の人間である。

まず名前。西園寺すみれ草。誤字ではない。すみれ、だけで充分なはずなのに、なぜか草の字がついている。あまりに語呂が悪いので、みんな「すみれ」とだけ呼ぶ。すみれ、だけなら平凡で良いのに、なんで草の字がついてるんだろう。

まあ、名前については本人に責任はないから仕方ない。ただ、男子の制服を着ているのは、ちよつといただけじゃない。髪が短く、きりつとした顔立ちのすみれ草によく似合っている。まさに男装の麗人。が、やはり平凡とは言えまい。

すみれ草は、ふむ？ と首を傾げる。

「朝から、しゃべる猫とでも会ったような顔つきをしているが」

「お前、うちに盗聴器でも仕掛けてるんじゃないのか」

勘が鋭い、というレベルじゃねえ。

「なんだ、当たりかい？」

「なわけねーだろ」

だったら良かったんだがなあ。

「さ、飯だ飯。お前も馬鹿なこと言っでないで、学食行けよ。学食派だったろ、お前」

「うむ、それがなんだか今日は、君の近くにいたい気分なんだ。なにか面白いことが起こりそうな」

「はつきりと迷惑なんだが」

「むしろ燃えるね」

天邪鬼め。

俺は弁当を取り出し、ふたを開けた。閉めた。

「ふむ、義明君」

「何も見えなかったぞ、俺は」

「私には海苔で『おにちゃん、抱いて!』と書いてあるように見えたが」

「何も見えなかった!」

「半沢つばさ、参上!」

ええー、ここで登場?

「つばさ、今、ちょっと取り込み中なんだがつて、なんで女子の制服着てんだよ!」

無駄に似合ってるのが恐ろしい。男だと知らなければ普通に惚れてしまいそうだ。というか、我が校の校則はどうなっているんだ。

つばさは、つかつかとこちらに歩み寄り、

「とうつ」

と俺の弁当箱を奪った。ふたを開け、どこからともなく取り出した箸で中身をむさばるように食らう。一分かからずたいらげると、手を合わせた。

「悪は滅した」

まあ、実の兄に肉体関係を迫る妹のメッセージが書かれた弁当というのは、善ではないだろうが。

「というわけで、義明、これをぶれんとふぉーゆー」

またもどこから取り出したのか、つばさは別の弁当箱をこちらに差し出した。

「……」

「開けてやらないのか?」

すみれ草が言う。無表情だが、笑いをこらえていることが分かった。

ばかり。開ける閉める。

「……………」

「ふむ、私には『お互いの粘膜をこすり合わせよう』と書いてあるように見えたが」

「むしろ、これだけ複雑な文字を海苔で書けたことに感心するわ！」
「気がつくと、クラス中の生徒が俺たちの方を注視している。くそう、俺は平凡に、注目されずに生きたいのに。」

「食べて、くれないのかい？」

目に涙を浮かべるつばさ。ああ、そうだった。昔から嘔泣きが、とても上手いんだよな、お前は。

くっ、どうする。これで食べなければ、完全に悪役だ。かと言って、食べたらず食べただで変な噂が立ちそうである。何より「粘膜」なんて文字を食べるのは嫌だ。

「た、食べ……………」

「食べさせんぞー」

間延びした声。いつの間にか、担任の教師が背後にいた。

「とつくに昼休みは終わつとる。席に着かんか。ほら、半沢も自分のクラスに戻れ」

分かりました、と存外素直に、つばさは教室を出ていった。その目に涙の跡は微塵もない。

俺の手には「粘膜」入りの弁当箱が残された。

「ほれ、早くそれを仕舞わんか。没収するぞ」

むしろ没収してください、先生。

結局、弁当はすみれ草に食べてもらった。

「貸し一つだな」

「いくらだ」

「ふむ、お金などいらないうさ。君には、金以外のものを貸しておいた方が面白そうだからな」
「悪魔め」

危ない貞操

「アレが来ないの」

帰宅した俺を出迎えた真紀穂の第一声が、それだった。
無視して二階への階段に向かった。

「待つてよ！」

行く手を塞がれた。仕方なく口を開く。

「何が来ないって？」

「生理よ、生理」

そこで、真紀穂は言葉を止め、

「おにいちゃん、生理ってなに？」

「知りませんもので騒ぐなよ！」

真紀穂は、ぷう、と頬を膨らませ、

「だって本に書いてあったんだもん」

「本？」

「『男をオトす1000の言葉』」

「初手から妊娠責めかよ、怖いよ！」

「もし本当に来てない場合は、訴訟も有効」

「言葉以外の手段に訴えてるよ！」

訴訟だけにな。

「と、に、か、く」

真紀穂はくりくりつと純真な 間違った方向に純真な瞳をきら

めかせて、

「あたしは生理が来てないから、おにいちゃんはあたしを抱いてくれるんだよね」

「生理が来ないのと来てないとじゃ、天地の差だな」

というか、他人が今の会話を聞いたら、俺、ペドフィリアみたいじゃねえか。

その時、

「半沢つばさ、参上！」
またかよ。

二階を見ると、ポーズを取ったつばさの姿。また二階の窓から入り込んだのだろう。まだ女子用の制服を着てやがる。

つばさは、ぴしつと真紀穂を指差し、

「生理なら、ボクも来てないぞ！」

「奇遇だな、俺もだ」

「運命だね、義明」

「はっはっは、いくら綺麗な言葉で飾っても、俺は単に生物学的理由だと信じて疑わないぞー」

「まったく、帰ってきた早々、騒々しいの」

しゃべる猫、登場。

「月のものがないから義明殿が抱いてくれるじゃと。たわけどもめ、全く逆じゃ」

ノワールは、にやふん、と鼻を鳴らす。器用なことを。

「月のものが来るということは、子を成せる証。そして房事とは子を成すことこそ、第一義じゃ。すなわち、月のもものないお主らには、義明殿とまぐわう資格などないということよ。この中で、その資格があるのは、わらわだけじゃ。のう、義明殿」

「いや、言ってることは、まあ正しいのかもしれないが、お前が猫であるという事実が説得力を皆無にしているぞ」

「猫とは嫌かえ？」

「できれば、初めては人型の異性がいいんだが」
「ならば」

ノワールは、ぶるぶるっと身体を振るわせた。一瞬、全身をまばゆい光が包む。

「これでどうじゃ」

ノワールの声で、その女性は言った。肩口にかかるくらい黒髪顔の造作は精巧な日本人形を思わせる。そんな中で琥珀色の瞳だけが美しく、というより妖しく光を放っていた。

全裸だった。

『さ、義明殿。抱いてたもれ』

腕をオープン。いろいろなところが丸見え。

「もうちょつというくらい大切にしろよ！ 情緒とかさあ」

よく見ると、猫耳やら尻尾やらがついている。明らかに人外だ。

『なんじゃ、この姿でも不満か？』

「それ以前の問題だ！ 猫耳や尻尾の生えた女に全裸で言い寄られる、なんてイベントは平凡な俺の人生には不要なんだよ！」

『こういうのを好む男性も多いと聞くがの』

「卑怯よ、ノワール！」

怒涛の展開に呆然としていた真紀穂が声を上げた。

「色仕掛けで、おにいちゃんをろうらくしようなんて！」

「そうだ！ こうなれば、こちらも」

いきなり、つばさがスカートを脱いだ。真紀穂もトレーナーをまくり上げる。ああ、相変わらずの幼児体型。BLの小説を書いたり、実の兄に肉体関係を迫ってきたりするが、まだまだ子供なんだなあ。お兄ちゃん、少し安心したよ。

つばさの方は、あえて見ないことにする。

つばさも真紀穂も全裸になった。玄関で、全裸の三人の男女に囲まれた高校生。どんな構図だ。

「さあ、誰にするの？ おにいちゃん」

「照れることはない、さあボクを選ぶんだ、義明。互いの粘膜をこすり合わせよう」

『義明殿、子を成しましょうぞ』

ダレカタスケテ。

と、その時、

『む、しまった』

ノワールの身体が再び光に包まれたかと思うと、もとの猫の姿に戻った。

「どうということだ？」

『実はの、人に化けるのは一日に一分が限度なのじゃ』

ノワールは首を傾げるように、こちらの顔をのぞきこんだ。

『一分あれば充分じゃろ？』

『どういう意味で充分なんだ！』

叫ぶ　そこで、いきなり玄関のドアが開いた。

「ただい……ま」

買い物がごを提げたまま、母親がぱかんと口を開けて固まる。ま
あ、そうなるよな。

「何やってるの、あんたたち」

妹と幼なじみが玄関ですっぽんぽんになっている理由を、必死に
考える……ハハハ、思いつくわけねえ。

かむばっく、俺の平凡な日々。

前世との対峙

結局、母親には、お茶を入れようとして、誤って真紀穂とつばさに熱湯がかかってしまい、火傷しないように服を脱がせた、ということに納得してもらった。納得……したかなあ。

ともあれ、これで俺は一つの決意を固めた。前世なんて俺は信じていない。信じていないが、それから逃げていても問題は解決しない、というか被害は広がるばかりだ。平凡な日々を取り戻すためには、真紀穂たちが言う前世とやらと正面から向き合うしか方法がなさそうだ。

しかし、妹、男、猫、って、なんで無理めなキャラばかりなんだ。これで可愛くて血の繋がってない異性（動物など論外だ）なら、俺も喜んで……断るかな。いくら可愛くても、前世うんぬん言うような奴と付き合うのは嫌だ。

「というわけで」

俺の部屋に全員集合させ、とりあえず正座させた。

「お前らの思い込み、妄想、病気、なんでもいいが、俺と恋人だったってんなら、その時のことを話してみろ」

思い込み等なら、それでほろが出るはずだ。

『義明殿、話の腰を折るようですまぬが』

「なんだ、ノワール」

『足を崩して構わんか、この身で正座はちときつい』

あ、やっぱりきつかったんだ。

「許可する、っていうか最初から正座なんかするな。もっと平凡に猫らしくしてくれ」

『理不尽じゃの』

「さて、それじゃ、まずは……」

「はいはいはいはい！」「ボクから話そう」

「あたしとおにいちゃんね、前世でね」「あれはそう、戦国時代

のことになるかな」

「せつくすしたの、いっぱい、いっぱい」「それはもう、お互いの身体のほくろの数まで分かるくらい、抱き合ったものさ」

「なによ！ あたしなんか、一日に数十回はせつくすしたんだから」

「回数を誇るなど愚の骨頂だね。問題は内容さ、どれほど密度の濃い行為をしたかだ」

「あたしはロウソクで」「三角木馬を知ってるかい？」

「はい、ストープ」

真紀穂とつばさに一発ずつ蹴りを入れて黙らす。

「誰が猥談しろと言った！ そういう下世話な話じゃなくて、もっと恋人らしいエピソードはないのか？」

「うーん」「

ないのかよ！」

ないらしい。

「ともかく、セックスの話はなし！ もっとこう、ピュアな感じの話をしろ。……ところで、ノワール、さっきから話に加わってないようだが、お前は何かないのか？」

ノワールは、にやふん、と鼻を鳴らし、

『まあ、あるにはあるがの。わらわはトリをつとめさせてもらおう。最後に話した方が印象に残りやすいじやろう』

真紀穂とつばさが、はっとした表情になる。

「ノワール、ずるい！」

「迂闊、このボクがそのことに気づかないとは」

「あたし、最後にする！ つばさちゃん、先どうぞ！」

「はっはっは、謹んで辞退させてもらおう」

「ええい、静まれ」

俺は、二人の言い争いを止め、

「真紀穂、つばさ、ノワールの順にしよう。ちょうど前世がどうとか言い出した順だしな」

「えー、あたし、最後がいいよ」

「ぶうたれるな。別に順番によって印象が良くなったり悪くなったりはせん」

「というか、前世がどうかいう話、端から印象が良いわけがない。分かったよ。あのね、おにいちゃんとあたしは……」

真紀穂の場合

あれは、めいじじだい？ のことだったの。

あたしには、いいなずけ？ がいたの。

兵隊さんだった。すごくまじめな人で、あたしのこともとっても大切にしてくれたの。

もうすぐ結婚、っていう時に、大きな戦争があつて……その人、結婚を延期してくれたの。もしかしたら、自分は生きて帰れないかもしれない。もしそうなった時は、僕のことは忘れて、新しい恋を見つけてくれ、って。

結局、その人は帰らなかったの。

なぜSMはMSと表記されないんだろう

「……いい話じゃないか」

これは予想外だ。

「その兵隊が、俺だったんだな？」

「ううん、おにいちゃんは、その後、町で見かけて連れ帰った物乞いの人」

「うおい！」

「あたしって典型的なMだったの。いいなずけだった人は優しすぎて物足りなくて」

「で、乞食を？」

「その人はSだったの。目と目が合った瞬間、これだ、って。結果的に相性はつちし。結婚しちゃった」

「お前、その許嫁とやらの謝れ」

「ふっ、その程度かい」

ふあさ、とつばさが髪を梳すいた。

「そんな話、巷にごろごろしてるじゃないか」

「そんな巷は嫌だ」

「さて、今度はボクの番だね。聞いて、おったまげたまえ」

「今以上の話が待ってるのか」

頭を抱える俺をよそに、つばさは話し始めた……。

つばさの場合

あれはそう、今で言うと戦国時代のことになるかな。

ボクは織田の家臣だった。農民出身だったわりには出世してね。

そりゃあ秀吉とまではいかないが、足輕大将まで昇りつめたんだよ。足輕大将っていうのは、まあ階級としては中の上、といったところかな。場合にもよるが、戦で大体百人前後の部下を指揮するんだ。その部下の中に、ボク好みの少年がいてね。初めて見た時に運命を感じたよ。（待て、前世からお前は男色家だったのか！？）

ボクは彼に自分の養子にならないか、と持ちかけた。もちろん衆道的な関係を結ぶつもりでね。（あ、無視しやがった）彼はその申し出を受けた。出世のため、というのももちろんあっただろうけど、彼もボクを特別な存在だと思っていたはずさ。自惚れでなく、ね。うぬぼれ

しばらくボクたちは蜜月の時を過ごした。だけど数ヶ月後、ボクの屋敷に一人の青年が乗り込んできた。どうやら、彼はボクに横恋慕していたらしくてね。少年を殺そうとしたのさ。馬鹿な話だよ、少年を殺したところで、ボクがその青年を愛するとは限らない。むしろ、逆の結果になるだろう。

青年が乗り込んできた時、ちょうどボクらは行為の真っ最中でね、もちろん刀など手放している。青年は少年に斬りかかってきた。ボクは、とっさに少年をかばって……。

つばさの場合（後書き）

これが今年最後の更新になりそうです。

次回は……多分1月2日ぐらいかと。こんな小説でも続きが楽しみです
だと言ってくれる人もいて、すごく励みになります。

来年もよろしくお願いいたします。

それではでは。皆様、よいお年を。

ぶっちゃけると

「……その青年の方が俺だったというオチか？」

「おや、それはまた斬新な見解だね」

「どうもお前らは自分の過去にオチをつけたがるからな」

「嘆かわしいね、そんなひねくれた見方しかできないなんて」

つばさは首を振り、

「義明の前世の前世は、間違いなくボクが愛した少年の方さ」

「ほう、じゃ、お前は俺をかばって死んだわけだ」

そう言つと、つばさは複雑な表情になった。

「いや、騒ぎを聞きつけてきた部下たちが青年を取り押さえて、事なきを得たよ」

「その表情だと、それで一件落着というわけじゃないみたいだな」

つばさは複雑な表情のまま、うなずき、

「その青年は打ち首になったんだが、痴情のもつれで騒ぎを起こした、ということ、ボクも降格になってね」

「ほうほう」

「そしたら少年に逃げられた」

「愛されてなかったんじゃないか！」

「ボクの情人になったのは、出世のためもある、と前置きしたじゃないか」

「一〇〇パー出世のためだろ、それって」

「ふ、義明。愛はお金で買えるんだよ」

嫌な達観だ。

「つばさちゃん、敗れたり！」

真紀穂が勝ち誇った表情で声を上げる。

「なんだかんだで、あたしたちは、ちゃんと愛し合ってたもん！」

つばさは、はっはっはと笑い、

「逆だよ、真紀穂ちゃん。相手に愛されていなくても愛し続ける。」

それこそが本当の愛なのさ」

「ストーリーカーの理屈だよな……」

もうツツこみ疲れてきた。いまさらだが、こいつらの話を聞こうとしたのが間違いだったのかもしれない。

『さて、それでは、わらわの番じゃな』

軽く伸びをして、ノワールが立ち上がる。

「ノワール、せめてお前はまともな話をしてくれ。いい加減、疲れしてきた」

『任せるがよい。そうさな、何から話そうか……』

ぶっちやけると(後書き)

皆様、明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお付き合いくださいませ。

ノワールの場合 その1

ミニズが

サブタイトル考えるのが

「ちょっと待て！」

『む、なんじゃ』

ノワールは不服そうな顔（猫のくせに表情豊かな）をするが、ツこまないではいられない。

「ミミズが深く関係してるのか？ 俺の前世との恋愛話に？」

『正確には前世の前世の前世じゃがな』

「そんなのどうだっていい！ ミミズが出てくる恋愛話ってのは、なんなんだ」

『それをこれから説明するのじゃが』

「聞きたくない、聞きたくないぞー」

『まあ冗談じゃがな』

「うがーっ！」

血涙を流す勢いで呻く。流れなかったが。それでも血尿や血便くらは、明日あたり出そうではある。

ノワールはにやふふ、と笑い、

『相変わらず、からかい甲斐があるの。前前前世のままじゃ』

飼い猫に手玉に取られる飼い主（俺）。人間としての尊厳が、ガラガラと崩れていくのを感じつつ、

「いいから、さっさと話してくれ。今度はアメーバとかミトコンドリアとか言い出すんじゃないかな」

『にやほん』

ノワールは咳払いなどしてから（つくづく器用な）、

『それでは話そうかの』

ノワールの場合 その2

さて、どこから話そうかの。

わらわは、ある村の領主の娘であつた。時代は……まあよろう。戦国時代よりは前だと言つておく。

その村はちよつと特殊な村でな。陰陽師とでも言えば良いのか、ともかく特別な能力を持った者たちの集落じやつた。山奥に結界を張り、部外者は村に辿り着けないようにしておつた。自分たちの能力が、他者に悪用されることを恐れてな。

が、ある日、その結界が破られた。内側からな。そう、裏切り者が出たのじゃ。

結界が破られると、すぐに大勢の兵が村を取り囲んだ。彼奴らは自分たちに与するよう要求してきた。断れば皆殺しだとな。領主だつた我が父は、それを拒んだ。我らの力は、一つの勢力に与するには強力にすぎ、危険であつた。今で言えば、核みたいなものかの。刀や弓の時代に、もし核を有する勢力があればどうなるか。しかもその危険性もよく分かつておらん連中に、じゃ。凄惨なことになるのは、火を見るより明らかである。

我らが拒否すると、宣言どおり兵達は村に攻め入つてきた。我らも抵抗はしたが、多勢に無勢、さらに向こうには我らと同じ能力を持つ裏切り者もいた。我が父の討ち死にを機に、村人たちは敗走し、散り散りになつた。わらわも供の者を連れ、森の中に逃げ込んだ。

追跡は執拗じやつた。供の者も、一人、二人、と倒れ、やがてわらわだけになつた。わらわも足をくじいて動けなくなり、木のうろに隠れていたが、ついに一人の兵士に見つかった。もはやこれまでと覚悟を決め、せめて相討ちにと機をうかがつた。だが、一向にその男は襲つて来なんだ。よく見ると、刀も身体も血に濡れておらん男は、周囲から集めた枯れ葉で、わらわの姿を隠した。

「少し待っている」

そう言い残して、男は去った。あれほど執拗に追ってきた他の兵達の気配も遠ざかっていった。

一晚、わらわはそこでじっとして過ごした。翌日、日が陰り出した頃、男が食べ物と酒を持って来てくれた。それらをペロリとたいらげたわらわを見て、男は笑った。

「それだけ元気があるなら、大丈夫だな」

なぜ、わらわを助けてくれるのか。そう問うと、人を殺したくないからだ、と答えた。どうやら男は將軍家の血筋だということでな。一度も人を殺したことがないのに、軍でもそれなりの地位にいるのは、そうした縁故があるからだ、と笑っておった。人を殺すのは、性に合わないのだ、と。今回の戦にも反対したそうじゃが、地位だけで実力が伴っていない男の意見は完全に無視されたという。すまない、と頭を下げる男に対し、わらわは複雑な気分じゃった。ただ、少なくとも男個人に対する敵対心は薄れていたのじやろう。だからこそ、

「もし行くところがないなら、一緒に来るか？」

この男の誘いに首肯したのじやと思う。

数年、わらわと男は一緒に暮らし、やがて夫婦めおととなった。幸せじゃった。時間は偉大じやな。村のことも、時々思い出して心が小さく痛む程度になっておった。

が、幸せは長くは続かなかった。

ある日、町を歩いていると、暴れ牛に出くわしてな。ちょうど、牛の進路に幼い子供がおった。わらわは、とつさに術を使い、牛を気絶させた。それが元で、わらわの素性がばれた。村の時と同じように、わらわ達の屋敷を兵が取り囲んだ。いくら男が將軍家の血筋とは言っても、さすがに許されることではない。

わらわ達は、心中しようと決めた。ここで、わらわはある術を使うことにしたのじや。それは禁呪とされるものでな。生まれ変わって、もう一度出会えたら、前世、いや、わらわの場合は前前前世じやが、その記憶が戻る、そんな術じや。

こうして、わらわと男は次の生に望みを託し、今度こそは幸せになろうと約束して、自決したのじゃ。

ノワールの場合 その2（後書き）

言い忘れてましたが、大体毎週金曜日更新です。

めんどくさくなっちゃった（てへ

俺はシャドーボクシングしながら、次の言葉を待った。

「よっしゃ、ばっちこい！」

『なんなんじゃ、その妙ちきりんな踊りは』

「オチが来るんだろ？ 戦闘態勢を整えておかないとな」

『いや、これで話は終わりじゃが』

「はっはっは、騙されないぜ。実は、そこにUFOが飛来して、脅威の科学力で死んだ二人は人型戦闘兵器として復活。火星の戦線に投入され、ザ・キラーとして名を馳せる、とかそんな話になるんだろ？」

『斬新じゃの。それはそれで面白そうじゃが』

「さ、カモン！」

『フリツカージャブまで打ってもらって悪いが、話はこれで終わるじゃから』

「馬鹿な……」

俺はがつくりと床に膝をつく。

「最後の最後で、こんなまともな話があるなんて……俺のこのツッこみのエネルギーはどこに使えばいいんだ」

「ノワール、ずるい！」

真紀穂が声を上げる。

「自分だけ、いい子ちゃんぶって！」

「同感だ」

と、つばさ。

「KYとは、まさにこのことだね。三段オチの何たるかを、とくと語る必要がある」

『にやふん、何とでも言うがよい。要は、義明殿がどの話に感銘を受けたか、である』

さあ義明殿、とノワールが促す。

『どの話が、心の琴線に触れたかの？』

「あたしだよ、おにいちやん。初めてあたしをムチで叩いた、あの日のことを思い出して！」

「ふっ、義明。二人に遠慮することはない。前前世と同じように、二人で蜜月の時を築き上げよう」

「と、いうか」

ゴゴゴ、と俺は力を溜め、

「なんで、お前らのうち一人とくつつくのが前提になっとなるんだあつー！」

ふう、すつきり。冷静に考えてみれば、陰陽師がどうかという話のどこがまともなんだ。ツツこみエネルギーを消費した俺は、一つ息を吐き、

「大体だな、今回、お前らに前世とやらの話をさせたのは、それが妄想や思い込みの類であることを指摘するのが目的なんだ。それをお前ら、ツツこみどころが多すぎて、当初の目的を忘れるところだっただろうが。で、だ」

俺はノワールに向かって、

「前世で術をかけたと言ったな。もしかして、今の状態は」

『うむ、わらわの術が発動したためじやろうな』

「でも、おかしいじゃねえか。お前のかけた術は、俺とお前の記憶が戻る術なわけだろ。俺の記憶は戻ってないし、なんで真紀穂やつばさの記憶まで戻ってるんだ。ぐちゃぐちゃじゃないか。いや、これはあくまで妄想という前提で、だが」

『うーむ、おそらく、じゃが。術が失敗したのかもしれん。何しろ禁呪と呼ばれるほどの術じゃからな。本来であれば、腕のいい術者が三人がかりで数日はかかる代物じゃ。それを数刻でむりやり形にしたため、不完全な形で発動してしまったのじやろう。こやつらの』
と、視線で、真紀穂とつばさを指し、

『こやつらの存在も、術に悪い影響を与えたのやもしれぬ。まさか、こんな近くに前世と前前世に因縁のある輩がおるとは、想像の埒外

じやった』

「ふーむ、なるほど」

もしかすると、このあたりが問題解決の糸口になるかもしれん。今の状態は、ノワールの前前前世がかけた術のせい（という妄想）だという。とすれば、その術とやらを解除した（と思い込ませる）ことにすれば、前世がどうかという話も収まるはずだ。そのためには、こいつらの妄想話に、しばらく付き合う羽目になるが……がんばれ、俺の精神力。

「ノワール、お前には今の状態を何とかできないのか？」

『できたら、とつくにやっておる。一度、失敗した術を正常な状態に戻すには、それこそ数年がかりの話になるぞえ』

数年もかかったら、多分俺は禿げる。

「ともかく、もつと情報が欲しいな。ノワール、その陰陽師の村とやらについて何かないか。どのへんにあった、とか」

『うーむ。すまぬ、なにぶん昔のことで、だいぶ地形も変わっておるじやろーし、特定はできん。む、そういえば』

「なんだ」

『同族のみが暮らす村ゆえ、名字はみんな同じじゃったな』

名字、か。直接、解決には結びつきそうにないが……。

『西園寺一族、と、わらわたちは呼ばれておった』

……ん？

「ふむ、たしかにうちは陰陽師の家系だが？」

翌日、学校ですみれ草に問いただと、こんな答えが返ってきた。まさか、こんな近くにキーパーソンがいるとは。運命、という文字が脳裏にちらつき、不愉快になる。

「なぜ、そんなことを聞くんだい？」

さて、どこまで話したのか。全部話せるならてっとり早いのだが、事が大きくなりすぎる危険がある。万が一、ノワールの存在が

マスコミなんか知れたら……想像して寒気を覚えた。できれば一生、マスコミの類とは深い関わりを持ちたくない。しゃべる猫とは違った意味で、奴らは非凡を持ち込んでくる。

とりあえず、ジャブを放ってみるか。

「あー、たとえば、だ。その、陰陽師がかけた術の解除、なんかはできるのか？」

俺がそう言うのと、すみれ草は目をぱちくりさせた。彼女にしては、珍しい表情の変化だ。

「な、なんだよ」

「いや、平凡をこよなく愛する義明君の言葉とは思えなくてね。知らないうちにオカルトにでも目覚めたのかい？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

ふむ、とすみれ草。

「残念ながら、私に、そうした特別な力はないよ。私の家族、親類の類にもね」

「そうか」

そう上手くはいかないか。

「ただ……」

肩を落とす俺に、すみれ草は、

「うちの蔵に古い文献が大量にある。もしかすると、その中に、そうした術の方法が書かれたものがあるかもしれない」

文献、か。有効かもしれない。要は、術を解いた、と三人（というか二人と一匹）に思い込ませればいいのだ。術自体は形式的なもので構わない。最後の手段として、その文献を捏造するという手もある。何にしても、文献を探して損はないだろう。

「分かった。放課後、お前のうちに行ってもいいか、すみれ草」

ふむ、とすみれ草は、なぜか嬉しそうに笑った。

いいサブタイを思いつくにはどうしたら

古めかしい扉が、姿に相応しく古めかしい音を響かせて開く。

西園寺家、すみれ草の家の蔵である。よく漫画などで都内に東京ドーム何個分だかの豪邸を持つ大金持ちが出てくるが、あれはフィクションだ。本物の大金持ちは、広島市民球場一個分くらいだ。

……それでも充分広いつつの。

なにせ蔵だけでも、俺の家と同じくらいの大きさだ。

蔵の中には電気が来ていないらしく、昼間だというのに薄暗い。

「さ、遠慮せず入ってくれ」

すみれ草は先にたつて、蔵の中に入っていく。俺もその後が続いた。

と、視界の端に映ったものがある。立派な桐の箱だ。もしかすると、こいつが……。

「なあ、すみれ草。こいつが陰陽師関係の文献なのか？」

「ふむ、どうだったかな」

「開けてみていいか？」

「構わないよ、今日はそのために来たんだろう？」

すみれ草の了承を得て、俺は箱を開けた。

『男をオトす100の言葉』。

「ここにもあるのかよ！」

「ああ、それは初版本だ。貴重なものだよ？」

「え、これ重版されてんの？ 恐っ」

大体、なんでこんなもんが、重要そうに桐の箱に入ってるんだよ。甚だしく気分を害しながら、本をもとの箱に収める。

「で、陰陽師関係の文献は？」

「ふむ、たしかこのへんに……ああ、あったあった」

無造作に散らばった本の山。

「これが、みんなそうだよ」

「うわ、覚悟はしてたが、こりゃ相当な量だな。とりあえず、手近なものを拾って読んでみる。」

「……………」

「閉じてみる。」

「どうしたんだい、複雑な表情で」

もう一度、開いてみる。

「おい」

「ふむ？」

「なんで、チョベリバなんて言葉が書いてあるんだ？」

「古い文献だと言ったじゃないか」

「チョベリバの、どこが古いつてんだ！」

「いや、ある意味古いかもしれんが、そういう意味の古さではないだろ、この場合。」

「未来視、というやつだよ」

すみれ草は言う。

「昔は一族の中で未来を見通す能力を持った人がいたらしい。記録を残す時に、未来の時代の言葉で書き残そうとしたのさ。もし当時の言葉で書いて、後の時代に解読できなかつたら、意味がないからね」

「それで、チョベリバってのはピンポイントすぎないか？」

大体にして、チョベリバという言葉を使うような出来事が記された古文書ってのは何なんだ。

「ふむ、まあ文献と言っても、日記のようなものが大半だからね。たとえば、これなんかは」

と、すみれ草は適当に手近な文献を拾って、開いて見せる。

「オッパッピー、と」

「古い古くない以前の問題だろうが！」

すみれ草の手から、オッパッピーと書かれた文献を奪い、放り投げる。

「俺が知りたいのは、もっとこう何て言うか、陰陽師の術？ みた

いに適度に怪しげな文献なんだが」

「ふむ、だったら、このへんかな」

と、また適当に文献を拾い上げる。表紙には『3日でマスター、レッツ陰陽道』。

「また怪しげなタイトルだな、おい」

「『今まで、モテなかった僕。陰陽道をマスターしたら、こんなかわいい彼女ができました。セフレも三人。この本には本当に感謝しています!』」

「お前、あれか。ただでさえ少ない信憑性を、根こそぎ奪い取るつもりか。そろそろ俺の堪忍袋メーターもレッドゾーンに突入するぞ」「そう書いてあるんだから仕方ないだろう」

まあいい。謳い文句は、この際置いておこう。要は、中身がまともならいいのだ。

「第一の術。ささくれが上手く剥ける術」

「わあ、それは便利デスネ」

「第二の術。栗の皮が上手く剥ける術」

「奥様方にも好評だあ」

「第三の術。消えかけた存在をこの世に繋ぎとめる術」

「何か分からないけど、すごそうデスネ」

「第四の術。ささくれが、もっと上手に剥ける術」
ぷちん。

「なんで、そんなにささくれにこだわるんだよ!」

「私に言われてもな」

不服そうに、すみれ草。

「ようし、分かった。そっちがその気なら、こっちも覚悟を決めた。片っぱしから、調べちゃる」

「ふむ、私も手伝うでしょう」

「助かる。俺が探しているのは、かけた術を解除する方法だからな」「了解した」

俺たちは手当たり次第、文献を調べ始めた。

で、結局、それらしい術は見つけられなかった。

「くそー、まさか、『だっちゅーの』が来るとはな」

帰途、ぼやく。その他にも、『カズダンス』やら『おっはー』などが出てきて、何度か堪忍袋の緒が切れそうになったことは付記しておく。

ため息を吐きつつ、自宅の玄関の扉を開ける。

「ただいまー」

返事がない。誰もいないのか？ 居間へ。

「あつ、おにいちゃん」

真紀穂がいた。

「よう、ただいま」

と、よく見ると真紀穂の右手に包帯が巻かれている。

「なんだ、怪我したのか？」

「う、うん、ちょっとね。包丁で手を切っちゃった」

「気をつけろよ」

「うん」

真紀穂は嬉しそうに微笑む。

「前世のドSなおにいちゃんも良かったけど、今の優しいおにいちゃんも好きだよ」

「あほ」

言い捨て、居間を出ようとする。

「おにいちゃん」

呼び止められた。

「もし、あたしがいなくなったら悲しい？」

「あん？」

何、馬鹿なこと言ってんだ。そう言おうとして、真紀穂の真剣な表情を目にし、口をつぐむ。

「……まあ、悲しいというか寂しいかな」

「そか」

えへへ、と真紀穂。

「変な奴だな」

なんだか照れ臭くなつて、さつさと二階へ上がることにした。

そういえば、今日はノワールの姿が見えないな。いつもなら、呼ばれもせんのに出てくるくせに。

部屋に戻ると、つばさがベッドに座っていた。

「また、お前は……窓から入るなとあれほど」

「ねえ、義明」

うつむきがちのまま、つばさが言う。

「ボクのこと好きかい？」

「ああん？ それはつまりあれか、『やらないか』ってことか？」

「真面目に答えてくれ」

顔を上げるつばさ。その顔は、今まで見てきた中で、一番真剣な顔つきだった。

「何かおかしいぞ、お前」

「頼むよ、義明」

懇願するような口調。

「あー、んと」

頬を掻く。調子が狂うな。

「嫌い、ではない」

「それは、好きだと解釈しても？」

「まあ、好きでないことはない、ってぐらいだ」

「良かったよ」

つばさは立ち上がり、窓を開けた。

「ばいばい、義明」

そう言つて、窓から出ていく。

「おい、危ないから玄関から」

ふと、目にとまった。つばさの左手に包帯。
なんだ？

何か、妙な胸騒ぎがした。

翌朝、起きて居間へ。テーブルの上にメモ。母親の筆跡だ。どうやら、今日は同窓会で遅くなるらしい。食事……は用意されてないな。仕方ない、自分で作るか。
と、

『義明殿』

呼び止める声。

ノワールか？ 朝っぱらから、しゃべる猫と対話するのは疲れるのだが。

「何だよ、って黒っ！」

ノワールは全身、真っ黒だった。

「あれか、名前と自分の姿とのギャップに苦しんで、全身を黒くする術でも使ったのか」

『そんな術があるわけないじゃろ。何に使っんじゃ』

「ささくれ……」

『ん？』

「いや、何でもない。それで？ その姿はどうしたんだよ」

『うむ、端的に言うんじゃない』

ノワールは猫なりに真剣な顔を作り、言う。

『前世に引きずられて、わらわたちの存在が消滅しつつある』

いいんでしょうかね。って

俺は階段を駆け上がり、真紀穂の部屋へ向かった。ノックもなしにドアを開ける。

「きゃっ」

ちょうど着替え中だったらしく、真紀穂は上半身裸でいた。右手には包帯をしたまま。

「おにいちゃん、夜這いなら夜にやってくれないと。あたしは、いつでもオッケーだけど」

「すまんが、今日はツツこんでやらん」

「ツツこむ、ってどこに？」

その発言に、だ。

俺は真紀穂の右手をつかみ、包帯を解いた。黒く変色していた。ノワールの身体と同じ色である。

「これは何だ」

「あー、えーと」

『真紀穂』

そこに、ノワールが入ってくる。

『義明殿には全て話した』

「ノワール！　なんで……」

『どのみち、最後まで隠しておけるものではない。それに義明殿には知る権利がある』

「これが消滅する予兆だったのか？」

俺の問いに、ノワールは深々とうなずき、

『前世の知識や記憶。ここ数日、そういったものが一気にわらわち流れ込んできた。それらが元の知識や記憶を上書きし始めたのじゃ。それによって前世と寸分違わぬ存在となった時、現世から、わらわたちの存在は消える』

「術の失敗のせいかな」

『おそらくは。禁呪とは、よく言ったものよ』
そういえば、あいつも……。

俺は窓を開け、何年ぶりかで屋根を伝ってつばさの部屋に向かった。

「おい、つばさ！」

「きゃっ」

ブルマを履いていた。

「義明、夜這いは夜に」

「それは、さっきやった。この状況にツツこむ気もない。左手、見せてみる」

左手には、昨日と同じように、包帯が巻かれている。それをほどくと、予想通り黒く変色していた。

「お前もか」

「……バレちゃ、しょうがないね」

つばさは、ため息を吐く。
と。

「！？」

俺がつかんでいた、つばさの左手が手首の先から、すうっと光の粒になって消えた。

『始まった、か』

後から入ってきたノワールのつぶやき。その姿も、心なしか薄くなっているように見える。

「おい」

こうなつては、なりふり構ってはいられない。

「すみれ草の家に行くぞ」

「頼む、すみれ草！」

部屋に通されるなり、俺は土下座した。

「こいつらを助けてやってくれ！」

「ふむ」

かしやり。

「突然、なんだい？ 説明してくれないか」

「待て、今の音はなんだ」

「君のメモリアルな姿を、写真に残せと神の啓示が」

「ずいぶんフランクな神だな、おい」

「まあ、冗談はさておき」

すみれ草はカメラを脇に置き、

「いきなり助けてくれ、と言われてもね。さっぱり話が見えないんだが」

「こいつらの」

と、俺は後ろの三人……二人と一匹を示し、

「存在が消えかかっているんだ」

「ふむ、ますます話が見えなくなってきたのだが」

「これを見てくれ」

俺はつばさのシャツの腕をまくった。さっきよりも消滅している部分が大きくなっている。

「ふむ」

すみれ草、絶句。

「まだある。おい、ノワール」

本当によいのか？

目線で尋ねてくるノワール。俺は小さくうなずいた。こちらのカードは全て見せる。すみれ草の協力が得られなければ、そこでエンドマークだ。

ノワールはうなずき返し、

『すみれ草殿。どうか義明殿に協力してほしい』

すみれ草、目をぱちくり。

今日はつくづく表情豊かだ。まあ無理もないが。あ、頬をつねっている。実際にやる奴がいるんだなあ。

「いったいこれは……」

「話せば長くなるんだが」

俺は全てを、すみれ草に話した。ノワールたちの前世（前前世と前前前世）のこと。ノワールの前前前世の術によって、それぞれの記憶が蘇ったらしいこと。術の失敗によって、存在が消え始めたこと。

そんな荒唐無稽な俺の話を、すみれ草は笑うこともなく聞いてくれた。

「存在の消滅……そうか、昨日の」

「そう、昨日見た文献に載ってた『消えかけた存在をこの世に繋ぎとめる術』。あれを使えば」

「分かった、持ってこよう」

「頼む」

すみれ草は部屋から出て、数分してから戻ってきた。

「ほら」

「すまん」

手渡された文献の表紙をめくる。

オッパッピー。

「これじゃねえっ！」

「冗談だよ。真剣になるのはいいが、深刻になるのはいただけない。少し肩の力を抜くといい」

すみれ草が別の文献を差し出してきた。それを受け取り、ページを繰る。

「あつた。これか」

ざつと目を通す。

「強い縁えにしを結ぶ？」

その先に詳しい説明があつた。

『存在の消滅とは、つまるところ現世に対する結びつき、すなわち縁が弱くなつたために起こる現象である。これを繋ぎとめるには、縁を強くすればいい。具体的には』

「愛する者と結ばれること」

「ふむ、意外に単純だね」

たしかに単純明快だ。だが、俺の注意は、小さく書かれた注釈に向けられていた。

『ただし結ばれる者とは本気で愛し合っていないとならない。つまり、救えるのは』

「一人だけ……」

俺はノワールたちに視線をめぐらせた。困惑、わずかな希望と、それらよりずっと大きい、あれは……あきらめ？

救えるのだ。ともかくにも一人は。三人とも救えないよりはマシだ。マシのはず。

「そんなわけあるかよっ！」

俺は文献を壁に叩きつけた。

「俺は！」

叫ぶ。

「全員大事なんだ！ 妹で、幼馴染で、飼い猫の、お前らが！」

静寂が部屋に満ちた。俺以外の全員が苦笑して、静寂が破られる。

『そう言うだろうと思っていたがの』

「おにいちゃんらしいよね」

「昔から、優柔不断だったからね、義明は」

「ふむ、せめて優しくすぎると形容してあげようじゃないか」

う、急に恥ずかしくなってきたぞ。

「い、いや今のは、場の雰囲気になされたっていうか、本心だけでも常日頃は全く意識してないっつーか」

「可愛いなあ、君は」

と、すみれ草が笑う。俺が投げ捨てた文献を拾い上げ、

「ともかく、この術は使わない、と」

「ああ」

「さて、それじゃあ別の方法を考えないとね。さっきの話だと、術が失敗したから、こんな状況になったということだけど、その術を解除する方法はないのかい？」

『無理じゃな』

ノワールが言下に否定する。

『簡単な術でも、発動してしまってから解除するのは困難を極める。ましてや禁呪じゃからな。腕のいい術師が十人がかりで、数年はかかるじゃろっ』

「ふむ」

やおら、すみれ草は携帯電話を取り出し、どこかに電話をかけた。「私だが。いま都合はつくかい？ うん、うん。分かった」

電話を切り、

「ちよつと出かけてくる」

「どこへ？」

「説明する時間が惜しい。寝室に案内させるから、そこで待っていてくれ」

そう言つて、すみれ草は部屋を小走りに出ていった。

もう終わりかー、それでは皆様

すみれ草がどこかへ行つて、一時間。俺たちは、すみれ草の寝室で、じりじりと時を過ごしていた。

部屋は意外に小さく、本棚、机、テレビと、置いてあるものも庶民なみ。ベッドも、普通に量販店で売っているようなものに見える。そのベッドに、真紀穂とつばさを寝かしていた。部屋の隅にはノワール。目を閉じて、じつとしている。

それぞれ、身体の変色はさらに広がり、すでに半分以上が黒くなっていた。呼吸も荒い。俺は、その様子を見守る。見守ることしかできない。

「こうしていると思い出すね」

口を開いたのはつばさだった。

「何をだよ」

「ノワールを拾った日のことさ、あれはまだ小学生の頃だったかな」
「ああ、俺たちが作った秘密基地に、ノワールが捨てられていたんだっけな」

「そうそう。それで真紀穂ちゃんも一緒に、一生懸命世話をして」

「いつの間にか、眠っちまったんだよな」

「親にこっぴどく怒られたよ」

「まあ、あれでうちの親がノワールを飼うことを認めてくれたんだから、結果オーライだろ」

「ふふ、そうだね」

「おいおい」

俺は出来る限り冗談めいた口調で、

「知ってるか、そうやって過去の思い出を語ることが死亡フラグというんだ」

「そいつは御免こうむりたいね。僕が死ぬ時は、義明の上で腹上死すると決めているんだ」

「言つてろ」

ああ、どうもだめだ。ツツこみにもキレがない。とすると、涙腺が緩みそうだ。

「おにいちゃん」

今度は真紀穂が口を開いた。

「もし、あたしたちが消えても、おにいちゃんが責任を感じる必要はないからね」

「いきなり、何言い出すんだ」

「おにいちゃん、優しいから。きっと自分には何もできなかった、つて悔やむと思うの。それは、あたしたちにとっても辛いから」

『すまぬ』

と、ノワール。

『わらわが術を失敗しなければ、いや、そもそも術を使わなければ、このようなことには』

「仕方ないよ」

真紀穂は笑う。

「好きな人とのことだもん。女なら、そうしちゃうよ」

「男でもそうさ。ボクがノワールの立場でも、術を使っただろうね」

『お主ら……』

ノワールは感極まった様子で、

『ホモ好きの腐女子と、女装趣味の変態とばかり思っていたが』

「ホモじゃない、BL!」

「女装は趣味じゃない、アイデンティティだ!」

うーん、実はこいつら、ほっといても大丈夫じゃないのか。

そう思った瞬間。

「ぐっ」

つばさが呻いた。その身体が光の粒になって消えていく。

「つばさ!」

「どうやら、時間が来たみたいだ」

つばさは、笑った。

「幸せだったよ、義明。君と会えた、その一点だけで、ボクは人生に満足している」

「馬鹿野郎、あきらめんな！」

「アディオス、義明。また来世で」

笑顔のまま、そう言っつばさは消えていった。

「つばさ……！」

「おにいちゃん」

と、真紀穂の声。そちらに目をやると、真紀穂の身体もまた、光の粒になって消えかけていた。

「ねえ、最後のお願ひ。強く抱いて、おにいちゃん」

言われる前に、俺は真紀穂を抱きしめていた。少しでも妹の身体が消えていくのを遅らせるように。それでも。

「ありがとう、おにいちゃん。あたし、おにいちゃんの妹で幸せだった」

その言葉を最後に、真紀穂は消えた。

俺は、しばらく呆然としていた。つばさ、真紀穂……。

そうだ、ノワール、ノワールは？俺はノワールのいたところに目をやる。

何もない。

最後の言葉すらなく、ノワールは消えていた。

「ぐっ、うわああああああっっっ！」

声を限りに叫ぶ。俺は、俺は、何一つ……。

「まだだっ！」

部屋のドアが開いた。そこに、すつくと立つ、すみれ草の姿。そして、もう一人。坊主頭でサングラスをかけた初老の男。なぜかナース服だった。

その男が、ぶつぶつと呪文めいた言葉をつぶやく。
すると。

「え……」

部屋中に光の粒が満ちた。それは少しずつ集まり、形を成してい

く。

「真紀穂、つばさ、ノワール！」

先ほど消えたはずの二人と一匹。眠っているようだが、それ以外、特に異常はないようだ。身体が、黒く変色しているようなこともない。

「すみれ草」

「何とか、間に合ったようだね」

えーと、この場合、何から訊けばいいのだろう。坊主頭が着ているナース服にツツこみたい衝動に耐えながら、

「その人は……」

「陰陽師さ、超一流のね」

「お前、親類縁者には特別な能力ちからを持った人はいないって」

「ああ、だから彼はただの知人さ。いちおう陰陽師の家系だからね。そうした人脈はまだ活きているんだ」

「でも、術の解除には腕のいい術師が十人いても、数年かかるんだろ？」

「ふむ。外を見たまえ」

言われるまま、窓の外を見る。広島市民球場なみの敷地。そこを埋め尽くす人、人、人。全員が坊主頭でサングラス、そしてある者はスク水、ある者はメイド服など、それぞれ割と変態ちつくな服装をしていた。

「十人がかりで数年なら、数千人いれば、すぐに解除できるだろう、とね」

えーと、どうしよう。ツツこみどころが多すぎて、どこにしようか迷うなあ。

よくよく見ると、廊下にも坊主頭のグラサンがひしめいている。

「どうも、一郎です」

「二郎です」

「三郎です」

「百郎です」

「全員、兄弟なのかよっ！」
「とりあえず、そこにシッシェむじやにした。」

また次作でっ

ぞろぞろと陰陽師たちが帰り、眠った真紀穂たちを寢室に残して俺とすみれ草は、居間で休息していた。

「また、お前に借りがでちまったな」

「ふむ。借りなどと思ってはいないよ。むしろ君には感謝しているんだ」

「？ どういう意味だよ、すみれ草」

「それだよ」

すみれ草は、こちらを指差す。

「みんな、私のことをすみれとしか呼ばないが、君だけはちゃんとフルネームで呼んでくれる。こんな名前でも両親がつけてくれたものだからね。愛着はあるんだ」

「そんなことで？」

「私にとつては重要なことなんだ」

「まあいいや、ともかく俺は借りだと思ってるからな。なんか困ったことや願い事があつたら言えよ。できる範囲で協力するから」

「ふむ。それじゃあ……」

その時、居間のドアが開いた。

「おにいちゃん！」

真紀穂が飛び込んでくる。一気にこちらに向かって走り寄り、抱きついてきた。

「どわっ」

「おにいちゃんおにいちゃんおにいちゃんおにいちゃん！」

すりすりすりすると、俺の胸元に頭をこすりつける。

と、その襟をつかんで、つばさがぺいと真紀穂を引き剥がした。

「義明」

そのまま俺を抱きしめる。ふうっ、と耳に息を吹きかけられ、思わず鳥肌が立った。

そこに無言のまま、真紀穂のシャイニング・ウィザード。つばさは声もたてずにふつとばされ、沈黙する。そのままスリーパーホルドに持ち込む真紀穂と。

「やーん。」

二人の争いを尻目に、ノワールが俺の足もとにすり寄ってきていた。

「って、ちょっと待たんかい」

「我に返って、声を上げる。」

「術とやらは解除されたはずだろ。お前ら、全然行動が変わってないじゃねえか。まだ前世の記憶が残ってるのか」

「ううん、もう前世の記憶はないよ」

「じゃあ、なんでつばさにスピニング・トゥホールドをかけてんだよ」

「ふ、それはね、義明」

苦痛に顔を歪めながら、声だけは平静につばさ言う。

「今回の件で、新たに君に恋をしたからさ。前世とは関係なく、ねにやーん。」

同意するようなノワールの声。

「え、ということは、事態は全く好転してない、というか、むしろ悪化してるじゃねえか!」

何とかしてくれ、という思いを込めて、すみれ草を見つめる。

「ふむ」

すみれ草は、つつ、とこっちに近づいてきて、

「えい」

やおら、俺の唇にキスをした。

「な、な……」

「というわけで、私も義明君の現世の恋人に立候補させてもらおう」「ずるい!」

真紀穂が声を上げる。

「おにいちゃん、あたしにもして！」

「こんなところに伏兵が潜んでいたとは、不覚。こうなったら義明、ボクとは唇を吸い合う以上の行為を」
「にゃーにゃー。」

「頼むから……」

俺は心の底から叫んだ。

「俺に平凡な人生を送らせてくれえっ！」

また次作でっ（後書き）

皆様、ここまでお付き合いくださいまして、ありがとうございます。
これにて、『りんね ぱにつく』完結でございます。

ここまで書いてこれたのも、ひとえに読者の方々のおかげです。拙い作品ではありましたが、少しでも楽しんでいただけたなら、望外の喜びです。

それでは、また次作でお会いしましょう。

二〇〇九年二月二十日　るうね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4454f/>

りんね ぱにつく

2010年10月8日14時04分発行